団体の名称	きりゅう市民活動推進ネットワーク
日　　時	令和２年１月２３日（木）　午後２時００分～午後３時００分
会　　場	桐生市民活動推進センターゆい
テ　ー　マ	①　桐生独自の子育て・教育環境の整備 ②　「新たな価値観」を創造・共有するまちづくり

開会
主催者あいさつ
お疲れ様でございます。市長もお疲れ様でございます。今回のふれあいトークは「おむすびの会」が中心となってやっているのですけれど、ひとつよろしくお願いいたします。
市長あいさつ
桐生市長の荒木です。今日はふれあいトークということで、お忙しいところお集まりをいただきましてありがとうございます。これは日頃、皆さんが思っていることを直接聞かせていただいて、これからの市政に反映させるというのが目的の会になっています。事務サイドの考えについても、もちろん簡潔にやりますけれど、できれば皆さんの考え方とか思っていることを聞かせていただく時間を多めにとってもらえればありがたいと思いますので、よろしくお願いをいたします。 なかなか自分の意見が言えない、なんてことがあるかもしれないですけどバンバン言ってください。お願いします。
意見交換
（司会） 今日はお集まりいただきありがとうございます。今回は「おむすびの会」だけではなくて、多くのお母さんや、子育て関係に興味があってご意見がある方を集めていますので、その辺の話をまずは市長からしていただければと思います。よろしくお願いします。 （市長） 今日のテーマですけれど、「桐生独自の子育て・教育環境」と「オール桐生で新たな価値観を創造・共有するまちづくり」という流れになっていますが、あまり固くならないで進めていければと思います。 自分が市長になってから８か月ちょっと経過をいたしました。市長になった時に、市民の皆さんに説明をさせていただいたマニフェストがあるのですけど、それが１０項目４８分野ありまして、その中に「子育て・教育環境」と「新たな価値観を創造・共有するまちづくり」という部分があります。 まずは「桐生独自の子育て・教育環境」についてですが、妊娠・出産・産後ケアからひとり親の方まで切れ目のない子育て支援を・・・この資料は、お持ちですか。じゃあ、あえて説明しなくても大丈夫かな。 （意見） はい、皆さんには「市長公約推進のための行政案」に先に目を通していただいていて・・・この部分は読んでの参加です。

（市長）
　じゃあ、簡単に。もう、そこに書いてあるとおりでございますので。逆に意見を聞かせてもらってからお話をしましょうか。または提案など、そういったものを教えてもらえればありがたいと思います。
（意見）
　では、そういう時間を長くとれればいいですね。
（市長）
　そうそう。もう、すぐそうしましょう。皆さんの「こんなふうにしたらもっと良くなるのになぁ」とか「実はこういう課題があってこうしてほしいのですよね」とかいう思いをどんどん聞かせてください。できるかどうかはわかりませんけど、そういう声をしっかり反映して、協議をする機会というのも大事なので。是非、反映させて行きたいと思いますのでよろしくお願いします。
（意見）
　以前、シルクホールで行われた市長の懇談会で（お会いした）・・・
（市長）
　ああ！
（意見）
　あの時の人です（自分を指す）。すてきな名刺をありがとうございました。
　これまでも皆さんと話していろいろな意見が出たのですが、その声を市政や市長に届けるにはどうしたらいいのか一般市民の私達はわからなかったのですが、講演会の時に「こうすればいいよ」と、今の市長さんが、こういうふうに市民の声を聞くという話をいうのを聞きました。今後もっと市民の声を聞くための方法は、どういうふうに考えているのでしょうか。
（市長）
　そうですね。こういう（ふれあいトーク）パターンと、それから行政サイドから言うと、市役所出前講座というのがあります。
（事務局）
　出前講座は、市長さんが行く場合には「市長講話」になりまして、生涯学習課で出前メニューを持っています。メニューはホームページでもご覧になれます。「市長講話」ということであれば、生涯学習課へ「市長講話を聞きたい」と要望を出していただいて、３日間くらい候補日をあげていただければ、あとは秘書室で日程調整させていただきます。
（意見）
　それは、人数は何人くらいとかありますか。
（事務局）
　１人２人ではダメで。１０人以上のグループです。
（市長）
　あとは、直接、個人的に私のところに各種団体の方々が時間を取って話がしたいと言っていただくこともあります。自分が空いている時間を秘書室で調整させてもらいまして、３０分とか１時間とかの時間帯でお話ができると思います。この間もここにいる方（参加者の一人）に

市長室に来ていただいて、いろいろ抱えている課題や提案などをいただきました。そういう形を選挙の時から私は望んでおりますし、自分が何回も言っている言葉に「現場に神宿る」というのがありますが、そこに住む人達の現場の声というのが全てだと思っていますので、そういう機会はこれからもしっかりと作っていきたいと思っていますので、遠慮なく。あまり形にこだわらずに。もちろんそういうシステムはあるのですけれど、フランクに言ってもらえれば、時間は調整して作るようにしたいと思っています。

（意見）

フランクに言っていいと言われても・・・なかなか・・・ねぇ。

（市長）

やっている人は結構多いですから。秘書室で調整はしてくれますので。何時頃がいいですかって。

（意見）

（個人的に会った参加者の一人に）どんな感じで行ったのですか？

（意見）

本当にフランクに行っちゃって。市長と話がしたくて、あの手この手でそこら中に話をしていたのですよ。だけどなかなかその動きが市長まで届かなくて。でも直接連絡しちゃいました。そしたら快く時間を取っていただいて。秘書室で日程を合わせていただいて、行ってきました。

（意見）

秘書課ですか？まず行ったのは。

（意見）

あ、そうです。秘書室です。

（意見）

そうですよね。そこが気になりますよね。どこに行ったのかなと。

（意見）

本当にもう、こんなに簡単に会えていいのですか、というくらいの感じで気軽に話していただけました。

（意見）

他には、例えばメールでとか、オンライン上でのシステムとか。

（市長）

個人的なところの部分で・・・例えばフェイスブックで友達になっていたり、そんな感じで繋がっていたり、ですかね。

（事務局）

秘書室の場合ですと、メールというのはあまりないのですね。やはり直接お出でになって、こういったことを聞きたいというのを伺ってという訪問型か、あとはお電話ですね。こちらとこれまでに全く接点のない方ですと、どういうことでいらっしゃるのですかということは確認させていただきますし、市長さんにも、こういう方はご存じですか、と必ず確認してから、了解を取って進めさせていただきます。

（意見）

ちょっとよろしいですか。今日は情報共有をしようと思って資料を作ってきました。

まだ名前のない会ですが、皆で話し合った「こういうふうになるといいよね」という意見をまとめました。出前講座で給食の試食をした中で、子どもが小学校に行っていますが、子どものことを考えながら作成した「これからやらなくてはいけないことや、調べなくてはいけないことはあるのですけど、今はこのように考えています」という資料です。

「ＳＤＧｓ給食」というタイトルで「ＳＤＧｓ教育を給食で」という内容です。

桐生市の給食は、本当はすごく良いし、試食もしましたが、皆さんがんばっていました。もっと桐生の給食に、何か題目というか、これだ！というのものでアピールできれば良いのではないかと思います。桐生市民としても子どもが増えていくことを望んでいます。他の市から入って・・・むしろ流出しないように。私の友達がみんな、笠懸や薮塚に行ってしまっているので淋しいなというのもあるので。「桐生の給食は良いのだよ」というアピールが桐生市は足りないので、自分としてももう少しアピールしたいなというのがあって。それで皆で考えて作成したというのが、この資料です。

（市長）

ＳＤＧｓについては、今年の４月１日、だから令和２年度から、桐生市の中で最上位計画という形に位置付けられた総合計画がスタートするのですけど、その計画にＳＤＧｓが反映されているというのが大きな特徴になっております。これからはそれを具現化する個別計画や実施計画を立てていく中で、例えばこういうＳＤＧｓ給食とか、目に見える形で市民の方々も参加していただけるような取り組みができればいいかなと思っているわけです。この間、この駅構内で「おむすびの会」の人達がやってくれた「わがままマーケット」というクリスマスマーケットなども初めてのパターンでした。そういう公民連携というか、若い子育て世代の方々が中心になって、この駅の構内外でやってくれるというのが非常に画期的なケースだったし、1,000人以上の人が集まったと報告などでも見させてもらいました。そういう同時多発的にいろんな方々が行ってくれるイベントというのは、この桐生市の売りというか、特色になってくると思うので、しっかり支援はしていきたいなと思っています。

（意見）

さきほど市長さんが「市民と協力して」と言っていたのですけれど、どんな関わりを考えていますか。

（市長）

もともと公約の中に入れていたのが「オール桐生」です。その具体的なのものが「産官学民金」でして、「金」は金融機関です。今まで金融機関は入っていなかったのですけれども。桐生市が持っているポテンシャルを全て使って、いいとこ取り、じゃないですけれども、「産学官民金」のそれぞれの団体の人達が関わることによって、さらにその活動がグレードアップする。そうやっていろんな形で生まれる市民の方々の関りは緩やかなものですよね。そういう人間関係ができて、いざ何かを立ち上げる時に「あの時にこの人がいたからこの人に手伝ってもらおうよ」という、そんな形の市民の人達の関りがまず第一歩かなと・・・

（意見）

今それを作っているのですか、そういう繋がりを。

（市長）
市長になってからは作っています。今作っているところなのですけれど。それ以前、僕も前は県議会議員と市議会議員、その前はＰＴＡや育成会、消防団や青年会議所で活動をしていたので、そういうネットワークとは別に、こういう若い子育て世代の方々とは、これから積極的に連携を取りながら進めていければいいかなと思っています。
（意見）
さっき言われていた、秘書室を通じて市長さんといろいろとお話するという、それもまた繋がりの中に広がっていく可能性があるという・・・？
（市長）
そうなればいいと思います。あれ、今回はキッズバレイの人が来ているのだっけ？
（意見）
ちょっと今遅れています。イベントで。
（市長）
前回のふれあいトークの中でもお話させてもらったのですけれど、100 周年の記念事業に、代表的な例では「ミニミュンヘン」、日本で言うと「ミニ横浜」や「ミニ札幌」と言う、子ども達だけの仮想都市があるのですが、その桐生市版「ミニきりゅう」を開催したいと考えています。これを夏休み中に作るにあたって、もちろん行政がいろいろと提案するなど関わってはいくのですけれど、あくまでも民主導でやっていただけるような形がとれればいいかなと思っています。その主導メンバーにキッズバレイさんとか。この間は、青年会議所のまちづくりのメンバーの人達からも、関わっていきたいなんて話もいただきました。疑似都市体験ですから、いろいろな方が関わらないとできないのですよ。そのような意味では、まさに「オール桐生」で取り組めるイベントの一つになると思っているので。あと２年くらいの間に骨子を固めて組織を作りながら「ミニきりゅう」というまちができればいいかなと思っています。
（意見）
ちょっと具体的に聞きたいのですけれど、「ミニきりゅう」というのは未来の桐生というような意味合いもあるのですか。
（市長）
子ども達が描いている都市像ですね。今の大人の都市と全く一緒です。大人は一切口出ししません。まずそこに入るのにそのまちでのみ使える一定のお金と約束が必要で、あとは大人の都市と一緒です。自分で稼いでもらう。お金を稼げれば土地も買えるし建物も建てられる。美味しいものも食べられる。悪いことをすれば警察に捕まって裁判にかけられる。そういう仕組みを子ども達の中で作れるような装置としてのまちです。今回、職員の人達が視察へ行って様子を見てくるパターンもありますし、青年会議所の人達からは、この夏に一泊二日でこれに似たような行事をやっていただけるなんて話もあるし、キッズバレイさんはキッズバレイさんで前からそういうノウハウは持っているので、いろいろとお話を聞きながら進められればいいかなと思っています。
あともう一つ言わせてもらいたいのが今日のテーマの一つの中にある、未来志向型の皆さんとの共創・共有という部分の中ではシェアリングエコノミーというのがありまして、皆さんが

持っている財産を共有する仕組みづくり、これを進めていければいいかなと。これはいろいろな可能性がありまして、子育てもそうですし、おじいちゃん、おばあちゃんの面倒を見てもらうのもシェアリングエコノミーでできますし。それからシェアリングシティ宣言を桐生市がまずして、先駆的に桐生市が取り組んでいるのですよ、という形がとれれば、まずはいいかなと思っています。そのシェアリングシティの登録には基準があって、もうすでにキッズバレイさんがやっている事業で桐生市としての登録ができるようになっているのですよね。わかりやすく言うと民泊などもそうで、例えば機屋さんで、素敵な母屋が全く使われなくなったものを、ネットのシェアリングエコノミーのプラットフォームに登録することによって、全ての人達がそれを見て、直接契約をして泊まってもらう。あとはよく例に出すのですけれど、皆さんが東京で結婚式や良いパーティがあるときにちょっとおしゃれな１０万円くらいするバッグがほしいなと思った時には、それをプラットフォームへ入れてもらうことによって、例えば１日１,５００円で借りて戻す、というのもシェアリングエコノミーの一つなのですよね。昼間は仕事に行くので自宅の駐車場が空いています、それを何曜日の何時から何時までだったら私の駐車場は空いていますよ、ということをプラットフォームへ登録すると、他の人がそれを見て直接交渉して駐車場を使えると。

行政だけでできることには限度がきているので、皆さんが持っている財産を一緒になって共有する、それがシェアリングエコノミーなのですけれど、そういう形も桐生市の中で取り入れていけば、皆さんが持っている力もさらに発揮していただけるような環境ができるのかなと思っています。

（意見）

その中には桐生市の財産も入っているのですか。

（市長）

公がもっている財産もその中に登録する必要も出てくると思うのですけれど・・・

（意見）

何かイベントをやりたい時に・・・皆さん、やりたい場所を借りる時にすごく大変じゃなかったですか？開催する場所が誰でも、そんなに高いお金を払わなくても簡単に使えるようになるといいなと。

（市長）

そういうのは逆にどんどん言ってもらえれば。おそらく縛りがあったり、規制はあるものはあると思うのですけれど、そうやって一つずつクリアする中で、実現させていくという形は全然ありだと思いますので。

（意見）

どこが開催場所として使えるのか、ということが・・・

（市長）

ベースオンザグリーン桐生では新川公園を使いましたが、普段はまあ使えませんし、都市公園に位置付けられている公園を、ああいう形で使うっていうのは普通では考えられないことです。でも県と桐生市の職員にもちゃんと理解していただいて。あのイベントは特殊な仕組みになっていて、賑わいはもちろんそうなのですけれど、そこの空いている場所を活用するという

ところがまず一つの利点で、売ったものをしっかりと税金として還元してくれる、そこまで考えられたイベントなので、非常に特徴のあるすばらしいイベントであると思います。

今の警察署長もいろいろと理解があります。この間の本町六丁目の車道ｎｉｔｅも、あれ本当はなかなかできないのですよ、道路を歩行者天国にしてイベントをするのは。道路交通法が変わって歩道のところの占用が少しできるようになったので、あのようなイベントができるようになったのですけれど。今度はあの本町一・二丁目のイベント、ワンツーフェスで歩行者天国にしたいなんていう話もきていますし。そういう今まで技術としてできなかった皆さんの活動が、ちょっとずつちょっとずつ努力をしながら実現しているというところに価値があるのではないかと思っています。これは無理だよねというところからスタートするのではなくて、どうしたらできるのだろうというところからスタートする気持ちを持ってもらえればありがたいかなと思います。

（意見）

第二の疎開地とか、東京の人が何かあったときに、一時的に疎開してもらうという取組があるのは知っているのですけれど、桐生市ではそういうことは考えていないのですか。

（市長）

公約の中にも入れているのですよ。セカンドハウス的な存在で、土曜日曜に東京の人達に桐生市の空き家を活用していただいて、格安で住んでいただく。それで土曜日曜に皆さんが開催しているイベントやお祭りなど様々な行事に参加していただくことによって、関係人口が増えていく、友達になっていく、最終的に移住定住に結びつけると。こういう仕組みが必要なので、セカンドハウスとか、今言ったシェアハウス的なものを環境的に桐生市としては整えると他の都市とはまた違った、差別化ができるという提案をしています。

（意見）

今困っていることを直接言ってしまってもいいですか。

（市長）

はい。

（意見）

私は子育て支援をしていまして、若いお母さん達の困っている話をいつもいっぱい聞いています。それで、桐生市には夜間に赤ちゃんを乳児園で預かりますというすごく良い政策があるのですが、その政策はほとんど機能していません。残念ながら乳児園さんには定員があって、ほとんど定員が空いていることがないからなのですね。預けたいお母さん達はいっぱいいて、私が乳児園に行く時に一緒に行って預けたいと話をするのですけれど、定員があって預けるのはほとんど不可能なのです、もうそれが数年続いています。これについては、私はどこかで言わないとまずいなとずっと思っていました。

（市長）

子どもを預けるだけなの？

（意見）

そうです。家に大人は夫婦二人だけなのに、お母さんが例えば入院してしまうということもありますよね、実家が近くにない、そういう場合、桐生市は預けるところがないのですよ。足

利市ですと民間でもありますし、ちゃんとそういうところに預けられるのですけれど桐生市にはなくて、皆さん困っています。
（市長）
そうですか。わかりました。
（意見）
しかも市役所にはそういう政策がある、けれど機能していない。
（事務局）
ショートステイのお話かと思います。
（意見）
そうです。夜のトワイライトステイ。
（事務局）
確かに、乳児園はいっぱいなのですが、去年あたりから空きが出た時にご利用いただいていることも実際ございます。それと、そのような現状ですので太田市の東光虹の家という施設とも新たに、２年くらい前に契約をしまして、そちらの利用も可能です。我々としましても何とか利用しやすいようにということを現在考えているところです。
（意見）
是非お願いしたいです。空いている時がほとんどないらしくて、そこが厳しいみたいです、お母さん達は。預けたいけれど預けられない。本当に困っています。
（意見）
空いているときが預けたいときではないものね。
（意見）
そうなのです、そうなのです。
（市長）
そういうところだよね。
（意見）
一時保育も保育園などであるのですけれど、明日預けたい、というような場合は駄目なのですよ。事前の予約が必要で、その月になったら何日何日っていうふうに言って、予約が取れたら一時保育はお願いできるのですけれど。ファミサポ（ファミリーサポートセンター）の方にも連絡した時があるのですけれど、ファミサポもあまり機能していなくて。預かる方の高齢化が進んでいて、登録している人も少ないようです。託児所はないにしても、ファミリーサポートセンターがそのあたりにもう少し力を入れて機能していけば、もう少しいいのかなと思います。
（意見）
私は下の子が小さい時にそのファミサポを使ったことがあるのですけれど、人が足りないからいろいろやってあげたいけどこれくらいしかできない、という感じで。がんばっていただいたのですけれど、ちょっと十分とは言えないということがありました。
（市長）
なるほど。

（意見）
つい最近聞いた情報なのですけれど、乳児園さんを退職した方が、個人として預かるということを始めたそうです。ただ高額になってしまう。そこでのサポート、お金のサポートがあればまだしも、すぐに預けづらくなりますね。
（意見）
いいサービスはいろいろあるのですけれど、本当にあともうちょっとというのがあるのかな。
（意見）
教育についても、もし、先程おっしゃっていた子どものためのまちに参加できるのは１０人ですとかとなると桐生の全部の子どもを対象にはできないのかなとなります。イベントもたくさんあるのですけれど、その日に行けない人はそれには参加できないし。
（意見）
イベントに登録してもその日に熱が出てしまって、お金払ったのに行けないということも結構あります。
（意見）
常にいろんなサービスが充実していくようになるといいのかなと。
（意見）
あとは助産師さんががんばってらっしゃっているのですが、ただ保険もきかないし、利用には１回３千円、４千円とかかるのですよ。その助産師さんは「本当はもっと続けて来てほしいけれど、１回３千円を１週間に１回２回というのは金銭的にも負担がかかるから行きたいけれどいけないという子がいっぱいいる」と言っていました。近くに実家がない人は助産師さんに母乳の相談やミルクの相談などの話を聞いてもらえるので、そういうところの補助や助成があるといいのにな、なんて思いました。
（事務局）
それについては母乳外来助成というのがありまして、１回千円で５回までという制度でございます。
（意見）
あるのですね。
（事務局）
そういうご案内は助産師さんにもしておりますし、健康づくり課の母子保健係にお問合せをいただいければ丁寧にご説明いたします。母子手帳をお渡しの時にもそういうお知らせをしておりますので。
（意見）
そうなのですね。ちょっと古いもので（笑）。
（意見）
利用できる期間は決まっていますか。
（事務局）
そうですね。期間はあります。産後３か月未満です。
（意見）

でも母乳はそれ以降も出るし、あとは卒乳する時とか。
（意見）
あとは、離乳食の開始の６か月以降や、１歳の卒乳の時にトラブルが出やすいのです。だからそれだとちょっと期間が足りないというか。母乳育児を続ける人は結構増えていて、私の子も２歳半になるのですがまだ続けています、食生活に気をつけるくらいしか今はできないですが。
（事務局）
期間制限のことについては、そういうご意見があったということで、また検討させていただきたいと思います。
（意見）
二人目を産むのを迷ってしまう人がいっぱいいるのですよ。特に実家が近くにない人は。二人目が出来ても、どうしようとすごく心配している人が今います。
（市長）
そういう不安がなくなるように、こちらもしっかりとＰＲしたり周知したりすることが大事かもしれないので。
いつも言っているのだけれど、群馬県で５歳階級別の人口移動の調査があって、１５歳から１９歳で、進学や就職のために１度、群馬県から離れる人が男性で６千人、女性で６千人いるのですよ。その人たちが５年後の２０歳から２４歳になった時にどれくらいまた群馬県に戻って来るかというアンケートがあって、男性は６千人のうちの３分の１で２千人なのですけれど、女性は６千人のうちの２００人しか戻って来ない。要はそこについて、なぜなのかいうことを皆さんに聞きたいなと思って。地方で結婚して子どもを産み育てるのに、おそらく何か問題があったり不安があったりするのでこちらに戻れないというという形があると思うのですけれど。実際こう数字的にしっかりデータが出ちゃっているもので、どうしたら地方で結婚して子どもを産み育てて暮らすことができるのかなと、その辺の部分を教えてもらえたらありがたい。
（意見）
女性が自分の実家、つまり奥さんの実家に住むというのを一般的にしてしまえばいいのですよ。旦那さんがあとについてくるのが良い。「自分の実家の傍」というのが奥さん、お母さんにとって一番楽。
（市長）
そうだよね。
（意見）
私も、いろんなお母さん達と触れているのでお話するのですけれど、食について安全で安心で美味しいというのはものすごいキーポイントですよね。すごく大きいことだと思います。
（意見）
子どものことを考えた時に、子ども達にとって幸せになる場所というのが一番というのがあって、食も大事だけれど教育もすごく大事だと思います。特色も出せないと。
（意見）
自分の子どもが次は小学校なのですけれど、ひろさわ保育園に通っていて美味しい給食を食

べているので、小学校に上がるのが不安でしょうがなくて。今は牛乳はほとんど飲ませていないのですけれど、これから学校で毎日牛乳を飲んだらどうなるのかなと。

（意見）

体調を崩す子どもがひろさわ保育園出身の子どもで出ているので、健康問題もかなり考慮していただけたら嬉しいなと思います。調味料とか。子どもの味覚を育てる。美味しいだけではなくて添加物やアミノ酸等をなくして、教材としての教育の給食であってほしいなと。

（意見）

ちょっと給食にからんで違った視点の、いわゆる豊かな食事ということだと思うのですけれど、家の子どもは今、中３と中１で今の学校給食が大好きなのですね。「給食美味しい」「今日は何が食べられるのだろう」と毎日楽しみにしているのですが、食物アレルギーがあって、卵と乳製品が取れないのですね。それで、一応、桐生市では代替献立として卵そのものを使うオムレツなどの場合には代わりにウインナーが出るとか牛乳の代わりには麦茶が出るとかの形で対応をしてもらっているのですが、それだけだと食べられないものがたくさんあるのですね。例えばパンも乳が入っていて食べられない。この間は、パンとシチューとフルーツという時があったのですけど、シチューも食べられないので、給食で食べられるのはフルーツだけだね、という感じで。それで、家から私が作った食べられるパンとシチューを持たせる、という形になってしまうのですね。ただ、子どもがすごく残念そうで。だから何かこう、そういった時に代替なのかな、アレルギーの子も食べられるようなものが給食として出てくれると子どもにとっては嬉しいのかな。あとはその、あえてここまでしなくてもいいのですが、例えばなのですけれど、本当に細かい部分だと、わかめスープが桐生市の給食で出るのですが、わかめと卵液が入っているのですね。なので、うちの子の場合だと、わかめだけだったら全然問題なく食べられるのですけれど、卵が入ってしまうことで食べられないので、家からわかめスープを持たせているのですけれど、同じアレルギーを持つ子どものお母さんと話していて、調理段階で卵を入れる前のわかめスープを何食かちょっと取り置くことができないのかねと。ひと手間になってしまうのだけれど、それをしてもらえるだけで、家からわかめスープを持たせなくても皆と同じわかめスープを飲めるよね、という話をしたこともあるので。なので、理想としてはアレルギー対応の出来るラインがあって対応してもらえるのが一番なのだけれど、小さいところからでも何か工夫の仕方でアレルゲンを取り除くことも出来るのではないかと思っていまして。そうすることで、皆と同じものを食べる楽しさを味わえる子が増えてくると嬉しいなと思っています。

（市長）

新しく学校給食中央共同調理場が、黒保根にも新里にも近い相生にできるのですが、そこにアレルギー対応専門の部屋が新しく作られることになりましたので、そういう点については、今の話を教育委員会に言ってもらえれば、おそらく対応方は可能だと思うのです。

（意見）

アレルギー対応食の調理ができるところなのですか。

（市長）

部屋ですね。詳しくは聞いていないのでこれからまた煮詰めるような形になると思うのです

けれど、その対応の部屋ができるようになります。
（意見）
嬉しい。すごい。
（市長）
どうやってその新しい建物を活かしながら、皆さんの要望に応えられるような形にしていくかということは、これからいろんな意見を聞きながらになると思います。
（意見）
残飯問題についてですが、今は給食の残飯も産業廃棄物として捨てられていて、食品ロスの問題と絡んでいます。まずは学校から残飯コンポストや地元業者で地域の畑でたい肥化などにできないか。お金がかかるから難しいということもあるかもしれませんが、それよりも地域のボランティアでできないかと。私もやりたいと思っていて、畑に穴を掘って埋めようかなと考えているのですけれど、もっと学校ボランティアなどで手伝えたらなと思っています。
（市長）
今、個人的に考えているのは、食物残渣を使って液体のたい肥にするということなのですよ。桐生独特のそういう業者がありまして、要は食の循環ですよね。リサイクルというか。食べ物の残ったものを液体肥料にして肥料として使って、その畑で野菜ができて学校給食になってという、この循環。それができればいいと思いますし、桐生市にそこを扱える業者がいるので、あとは費用の問題などいろいろとクリアしなければならない部分はあるのですけれど、独自の展開ができるかなとは思っていますね。
（意見）
ちょっと教育のことでお伺いしたいことがあります。うちの末の娘が中３なのですが、不登校を経験していまして、教室の授業には出られないけれども学校の中にある教育相談室であればいられるので、今は授業には出ず、相談室に登校するという形をとっているのです。自分が親として経験したこともあって、不登校の子のお母さん達とのコミュニティづくりみたいなこともしているのですが、話を聞いていくと、学校には行けないけれども家で勉強している、ホームスクーリングのようなことをしている子や、桐生ですと教育研究所に行っているお子さんなどがいます。あとはフリースクール。でも桐生にはフリースクールと言われるものが無いという現状で、館林や前橋まで行かれている方もいらっしゃいます。なので、学校に行けない、皆と同じには勉強できないけれども、ちょっと違う場を作ってあげれば勉強できるという子への対応というか教育ができる場を桐生でもっと増やしてもらいたいなということをすごく感じているのですね。
家で学校からもらってきたプリントを一生懸命解いて勉強して先生に提出するのだけれども、でも学校に来ていないから通知表の評価は斜線となってしまう。それを見て子どもはがっかりして勉強しなくなっちゃったと。あとはフリースクールに来ていても出席とはならない。教育研究所ならたぶん出席として認めてもらえていると思うのですけれども、フリースクールですと今は出席扱いにならないのですね。なので、そういったところで、もうちょっと認めてもらえる幅が広がったり、もしくは桐生市に学べる多様な場所がもっとあったりすると、学校には行けないけれど、そこでなら出来る子どももいるのではないかなと思うのですよね。

（市長）
　それは参考になります。考えさせてもらいたいと思います。
（意見）
　公のお仕事なので、皆さんに平等にいろいろなサービスを提供しないといけないのだろうとは思うのですけれど、こちらとしては選択肢が増える方が良いのかなと思うのです。アレルギーの話もそうなのですけど、選べるというのが良いと思う。
（市長）
　そのとおりだと思いますね。
（意見）
　不登校の子のお母さんとの座談会も開いているのですけれども、子どもが学校に行けないと、お母さんも目の前が真っ暗になっちゃうのですね。「皆と同じに出来ない」「この子の未来はどうなってしまうのだろう」って。でも「学校に行けなくてもこういうやり方もあるよ」「こんな場所もあるよ」と話すだけで、「じゃあこちらへ行こう」というようなこともできると思うのですね。そういった機会が桐生にあったら本当に親御さんも安心できる。
（意見）
　いろんな選択肢があるといいですよね。どこかの市で「図書館にいらっしゃい」って言っていた人がいました。図書館に来ても判子を押してもらえたら（出席扱い）自分でいろんなものを研究できるわけですよね。それも良い時間だったよと言われれば良いと思います。
（市長）
　具体的な対応の部分に関しては、研究をさせてもらうような形になると思うのですけれど、子どもの命を守る専門の係とか、そういうものを新たに、機構改革する中で作っていくつもりでいます。現状でも桐生市は、子育ての相談窓口はしっかり充実しているものですから。ワンストップの相談窓口です。そこで受ける相談の対応についてはしっかりするように、今までもしてきているつもりなのですけれど、そういう窓口自体がある、ないという周知もなかなかできていない部分もあるので、これからまた、いろいろなツールを使ってしっかりＰＲしていければと思っています。
（意見）
　話がちょっと戻ってしまうのですけれど、５歳ごとの人口の話で、女性が戻って来ないのはなぜかということですが、私の友達の場合は交通の問題というか、職場と、夫婦の実家が前橋と桐生にある場合、その間にあるのが笠懸や薮塚になるのでそこに住むのです。さっきおっしゃったように、そういった問題を上回るアピールポイントがあるといいと思います。私も「こういう良いことがあるから桐生に来なよ」と言いたいのですよね。今のところアピールできるのは待機児童がいないことなので「すぐに入れるよ」と言うのですけれど、「でもやっぱり実家が・・・」なんて言われるので、給食など、何か桐生独自のアピールポイントがあるといいなと。桐生はアピールするのが下手な人が多いので。私も桐生から千葉県の方の大学へ行って、また桐生に戻ってきたのですけれど、そういうアピールの弱さを実感しています。もっと良いことをやっているのだからアピールすればいいのにと思っています。
（市長）

ああもう、おっしゃるとおりです。桐生市は、おそらく平均点以上のものが比較的多くある街だと思うのですね。すべてに劣っているけれどここだけは負けない、というような都市像ではないのですよね。幅広く平均点。広く浅くではないですけれど、平均点を目標に進めてきたところがおそらくあったのだと思うのです。ＰＲする時に「どこが桐生の良いところか」をなかなか一言で言えないというのが今までの環境だと思うのだけれど、やっぱり「桐生ブランド」というのは大事ですからね。「この部分はどこにも負けない」「ここが売りだ」というのは大事なので、しっかりと出していかないといけないと思います、いろいろな場面で。

（意見）

桐生が他市に比べて負けないところは、市長から見て何かありますか。

（市長）

これはやっぱり自然。山紫水明ですよ。首都圏から１００キロ圏で、関東平野の後ろに山を抱えているというこの地形はどこにもないのですよ。首都圏がメガマーケットで、どこからもその人たちを呼んで来ることができる。なかなか地方都市の差別化が難しいのですが、その中で東京から１００キロ圏の平野である桐生市から、車で１０分行くと軽井沢のような避暑地になるのですよ、って言えます。梅田ですね、はい。

（意見）

避暑地、ですか。

（市長）

いやもう、梅田軽井沢計画なんていうのも正直言って考えているくらいで。軽井沢以外では、京都の嵐山とか、鞍馬とか。あの辺のイメージは完全に梅田はできますので。

（意見）

川内の仁田山。織物の発祥の地としてアピールをもっとできたら。世界遺産になりそうだったのですけど。

（市長）

これからアピールするのは日本遺産なのですよ。桐生に何か所あるかわかります？

（意見）

日本遺産ですか？重伝建？

（市長）

世界遺産というのは、保護一辺倒なのです。文化財なので守るというのが主なのだけれど、日本遺産というのは建物なり文化を活用することによってまちづくりに繋げるというものです。桐生は「かかあ天下－ぐんまの絹物語」というタイトルで６か所日本遺産があるのですよ。６か所はね、川内の白瀧神社、それから巴町の絹撚記念館、永楽町の織物記念館、民間ですが後藤織物さんと、織物参考館“紫”さん、最後は本町一・二丁目天満宮の重伝建地区。この６か所が日本遺産なのです。

（意見）

へぇ～。知らなかった。

（市長）

是非広めてもらえれば。

（意見）
もしよかったらどうぞ。（「かかあ天下－ぐんまの絹物語」のチラシが配られる）
（意見）
ありがとうございます。
（意見）
山形から来た旦那が「桐生は重伝建とかすごいよね。なんでそういうこと知らないの？アピールしないの？」と言っていました。
（市長）
一生懸命やっているつもりなのですけれど今一つ、なかなかね。ＰＲがんばりますので。
（意見）
市長さんが桐高の出身だっていうのは私の父も知っています。桐生の出身のアーティスト、オリンピックの大河ドラマ（タイトルバック絵）の人もそうですよね。
（市長）
ちょうど今、企画を美術館でやっているのですよ。
（意見）
それについても、大川美術館だけでなくもっと大々的にするとか。そういう桐生から外へ行った人に桐生市のアピールを頼んだらどう？と言っていました。
（市長）
おっしゃるとおりです。山口晃さんは桐生の芸術大使になっています。どこに行っても山口さんって大人気で、超多忙なのですけれど、今年の１月１８日から大川美術館でやっている企画展には本人に来てもらっています。「ショッピングモール」という未完成の絵なのですけれど、生で見られますから。めったに見られる機会がないので、大川美術館に行っていただければ。
（意見）
逆に「もうちょっと力を入れたい」というのはないですか。今、良いところを教えていただいたので。「まだちょっと」というところについて教えてください。
（市長）
日本遺産は特にそうですよね。これだけまちづくりに興味がある皆さんが日本遺産を知らなかったということがね、大きな課題ですよ。これはしっかりとＰＲをしていかないと。
（意見）
場所自体は知っていますけれど、日本遺産だったというのは知らなかった。
（市長）
しかも群馬県内に１３か所指定されているうちの半分が桐生市にあります。
（意見）
へぇ～。
（意見）
ノコギリ屋根ももっともっと活用してほしいですね。活用し始めていますよね。
（市長）
そうですね。今でもパン屋さんがあったりパーマ屋さんがあったり。いろいろと活用しても

らってはいるのですけれども。結局、持っている人の財産ですので、「残してください、残してください」と桐生市サイドは言うのですけれど、なかなか。所有者の個人の方が固定資産税も払わなくてはいけない、維持管理も必要だとなってくると、もう更地にしてしまうなど、なくなってしまうことがあるので、その辺の利活用というのはこれからの大きな課題だと思います。

（意見）

そうですよね。私はノコギリ屋根の図書館にしたらいいなと昔からすごく思っているのです、子どもの図書館。光が差し込むじゃないですか、北側の窓から。もう一つの理由は、子ども達が桐生に誇りを持てるようになると思うのです。太田市が太田図書館を作りましたよね。あそこは、太田市の産業を誇れるような作りになっています。デザインも、置いてあるクッションも全部太田市の中小企業が作ったものです。

（市長）

書いてあったよね。

（意見）

桐生はノコギリ屋根で子ども図書館ができたらって、私はずっと夢を持っていたのです。

（意見）

図書館が弱いと思うのです、桐生は本当に。図書館がもったいないです。昔から貸出をピッとやっていて、ハイテクの導入は結構早かったですよね。

（市長）

最初の取組は早かったね。

（意見）

図書館もそうなのですけれど。私は隣の足利市の出身で結婚して桐生にきたのですけれど、子どもを産んで不思議だったのが「桐生には児童館がない」ということです。足利では「こども館」というのですけれど、だいたい各地区にあります。桐生にはないので、そこを図書館などと絡めて、室内でも外でも遊べる場所があるといいなと。

（市長）

室内で遊べる場所として、桐生駅北口の保健福祉会館にキノピーランドがありますね。またちょっとイメージ的には違うかもしれないけど。

（意見）

中学生が遊べないのですよね。もっと学術的な、ちょっと知識を学べるところがあるといいなと。

（意見）

この間、渋川市に行ったらユートピア赤城（だれでも広場）があって。もう素晴らしかった。

（市長）

どんななの？

（意見）

福祉財団が主となって運営しているのですけれど、市と提携して。スタッフもいなくて、人達の思いやりとモラルですべてが成り立っている会館。もともとは介護施設だったものをリニューアルするのですけれど、それをすべて民間の力でやった。意見も取り入れていて、その意

見の中に「僕（高校生）は、ここのユートピア赤城のサービスに触れて、人達に触れて、何て素敵な活動なのだと感じた。なので、僕はこのままここにいて、あなた達と一緒にまちづくりをしたいのです」という手紙が貼ってありました。ママさん達みんな、それをみて泣いているのですよ。そこには食堂というかイートインスペースがあるのですが、そこの割り箸も「余っている方は持ってきてください」となっている。皆で力を合わせて、まちが、子ども達の未来のためにそこの施設を作っている。

（意見）

手作りで遊具を作ったり、どんどん拡張していて、壁も手作り感がある。子どもだけでなくて大人向けにマッサージチェアがあって漫画が読めたりとか。

（意見）

寄附で成り立っているそうです。その建物だったり器具だったり。

（意見）

中高生向けにお勉強部屋もあります。そこは、子ども立ち入り禁止と書いてある。中学生以上の子ども達が勉強に集中できるようなシステムになっている。

（意見）

空いている学校などで出来ないですかね、こういうの。

（市長）

学校よりも長寿センターのほうがいいかな、今の話を聞くと。

（意見）

さっきも話が出たように桐生の人達ってインフルエンサーとしてはすごく引っ込み思案なところがある。でも今日ここにいるママさん達が、周りのママさん達に拡散するときに、良い部分を伝えてもらうというのが桐生市としてはベストなやり方かと思います。拡散は悪い部分が伝わりやすいのですよ。桐生のまちづくりに参加させてもらっているからか、なぜかいろんな方から市のことを相談される機会が増えてきました。相談は「いや、そんな人達ばかりではないのにな」「そんなサービスばかりではないのにな」と思う内容もあるのですが、悪い情報が先行して拡散されてしまうと、桐生市の良いところがすごく悪い方向にいってしまうと思います。できればここにいるママさん達のような人が増えて、インフルエンサーとして良い部分を発信する力を一人一人持つことが、そういう人が増えることが、市の地域財産になるのかなと思います。

（市長）

確かにこれからは、そういうやり方として、一つの大事な要素になりますね。

（意見）

先程、長寿センターの話が出ましたが、私には８９歳の祖母がいて、お風呂が億劫だと言うので長寿センターへお風呂に行かせたいなと思うのですけれど、若い人は高齢者と一緒に入れないから行けないのです。子どもは子どもだけ、年寄りは年寄りだけのサービスというのではなくて、切れ目のない、老いも若きもどうぞというサービスがいいなと思います。

（市長）

桐生は長寿センターが充実していて、ただ場所によってはこれから存続を考えなくてはなら

ないところも出てくるので。統合するなど。僕も参考にさせてもらいます。
（意見）
長寿センターと児童館が一緒になってくれれば。子どもと行って、おばあちゃんを風呂に入れてっていうのができますね。
（意見）
母子手帳アプリについてお聞きしたい。
（事務局）
これはまだ検討段階ですが、汎用版に「母子モ」というアプリがあるのですけれど、それを桐生市用にカスタマイズして、桐生市の情報を必要とするお母さん方や、お子さん方とも情報共有していただけるような、そんなことを狙いとしています。とにかく便利に。市からも情報を発信します。利用するお母さんは、例えば予防接種の情報管理などにも使ってもらえる。紙の母子手帳は当然大事にしていただくのですけれど、その母子手帳を補完する形を考えています。今、お母さん方もスマホについては、多くの方がお持ちですので、そのスマホを使ってより便利に子育てをしていただきたい。あとはお父さんの育児参加というのもとても大事なポイントになってくるかと思いますので、そういうことを促す意味でも是非普及させていきたいなと。できるだけ来年度の早いうちに立ち上がるようにしたいと考えています。
（意見）
それはお父さんとお母さんで母子手帳の中身が共有できたりするのですか。
（事務局）
そうですね。アプリをご自分のスマートフォンにダウンロードしてもらえば大丈夫ですので。詳しいやり方は、今ちょっとわからないのですけれども、そういう使い方もできるアプリであると聞いております。
（意見）
個人個人それぞれの必要な情報、例えば注射の時期って人によって違うじゃないですか、あなたは何月の注射ですよ、という個人向けの通知が来るのですか。
（事務局）
どこまでそうできるかはわかりませんが。プッシュ通知ってありますよね、その方に適した情報が直接届くような。そういうプッシュ通知機能がありますので、かなり便利な使い方をしていただけるのかなと考えています。細かいところの機能はまだちょっと確認できていないのですけれども、予防接種なども年齢によってまちまちですので、その人に合った情報が送れるのか、もしくは広報に載った情報が定期的にアプリにも入るとか、そのようなことになるかもしれないですけれど、いずれにしてもできるだけ使い勝手が良いような形で業者さんとも詰めていきたいなと考えております。
（意見）
使いたい人はそういうアプリを使えるなと思ったのですけれど、スマホといえば、私の子どもが小学校に上がったのですが、小学校ではスマホ対策がすごいのです。親がやっているところを見せないとか、使用時間を３０分以内にするとか。今までスマホを便利に使ってきたのにそういう対策がいきなり出てきて、戸惑っている状態なのです。学校教育現場の小１ギャップ

もありますので、母子手帳アプリが便利なのはいいのですけれど、そういった小学校との絡みもあるので、入学前と後での一貫した対策をしてほしい。小学校に上がる前から子どもにはスマホを見せないようにするとか。赤ちゃんにスマホを見せると中毒になる確率が上がると勉強したのですけれど「早いうちのほうが中毒になりやすい、しかも深刻になりやすい」という情報もあったので、その辺の注意喚起もできればお願いしたいです。

（事務局）

また別の切り口になると思うのですけれど、スマホで遊んでいるお子さんが多いと思いますので、その辺のところについては保健師を通じて指導をしていくということになるかと思います。ですが、小学校に入ればまた学校の方での指導ということにはなると思いますけれども、そのようなこともご意見として承りたいと思います。

（意見）

行政と学校の考え方にはかなりズレがあるけれど、でも教員は国家公務員だから立場上あまり行政に強く言えないというのもあるようです。学校のトイレ問題ですと、今はみんな洋式トイレですけれど、修学旅行先で和式トイレの使い方がわからず、数が少ない洋式のところに並んでいるとか。和式トイレを使えない子どもが増えてきているので、本当は両方あった方が良いのではないか。衛生的にも洋式トイレは掃除がしきれなくて、和式だったら綺麗だったのに洋式だと荒れて臭くなっている。そういう現状があるので、もっと現場主義というか教育の現場を見ていただいて・・・でも学校の先生は気張っちゃうのですよね、その場だと。市の職員や栄養士が見に来ると「じゃあ給食の時間を長めに取って良く見せよう」などというのがあるので、そういうところを念頭に置いた上で調査に来ていただけるとありがたいです。その現場を見てきたのですよ、職員室の冷蔵庫は残った給食の牛乳だらけなのです。食品ロスも含めて、生の声を聞ける機会は大事だなと思いました。

（意見）

市長は、市長になってから給食を食べたことはあるのですか。

（市長）

市長になってからはない。ごめんなさい。まだないです。

（意見）

ああ、是非とも食べてください。あと保育園もそれぞれ給食にすごく力を入れているので、むしろそういったところの給食を食べてみてもいいかなと思います。黒保根保育園では、ご飯給食なのでパンなんか出ないです、おやつでは出たりするのですけれど。「食」って子どもには一番大きな要素なのですが、特に桐生市はそういう食材も市の財産としてすごくあるので、そういうところをもうちょっと見てもらえたらいいかなと思います。給食にはどうしてもレトルトが入っているのですね、全部ではないのですけれど、やっぱり手作りのものがあったらいいなとは思っています。でも美味しく食べている子もいますし、親も朝は忙しいし、夜も仕事をしていれば、給食で１食分の栄養を取りたいというお母さんもいるのですよ。市長にも、まずは食べてもらえたらなと思いますので、是非。

（市長）

ありがとうございます。オーストラリアなどはわざと給食を不味く貧相にして、はやく家庭

に帰ってお母さんの夕食を食べるのを楽しみにさせるという給食の在り方もあるのですよ。
（意見）
ええー。駄目、それは。
（市長）
やっぱり国の文化が違うのでしょうね。
（意見）
伝統的な食事、ご飯とみそ汁があれば、それでいいのかなと思います。
（意見）
基本は、必要最低限あれば、予算をかけなくても良いと思っているので。
（意見）
絵本に沿った給食が月に１回出るのですよ。あれはうちの子が大好きなのです。この間はお餅だったと言っていました。
（意見）
そういうストーリー性があると子どもは喜ぶのかな。
（意見）
その延長上でオーガニック献立とか全員でアレルギー食を食べようとか、食べる時間の確保とか。
（意見）
オーガニック給食に変えていこう、オーガニック給食はどのように良いのかということで、今度２月に講師を呼んで講演会をするのです。是非来てほしいのです。なぜ子どもの給食をオーガニックにすると良いかということがわかるようになっています。
（市長）
ああ、そうですか。（チラシを）ありがとうございます。見させていただきます。
（意見）
もう時間でしょうか。他に給食以外のことも言いたいことがあればどうぞ。
（市長）
それだけ給食って、重たい要素があるのですね。
（意見）
重たいです、重たいです。発達障害の子にも関係するのです、給食は。
（意見）
給食を良くすると学校の悪いところが変わったという事例もいっぱいあるのです。
（意見）
学校給食を食べた後に、ひろさわ保育園の給食を食べて来てください。
（市長）
美味しいのですね。
（意見）
出汁から全部取るのですよ。これは桐生の誇りですよ、保育園ががんばっているというのは。
（意見）

日本の食事はご飯とみそ汁。ココトモさんでふりかけとみそ玉作りのイベントの担当をしてきたのですけれど、一番人気のイベントになったと言ってくれました。お母さんも美味しいご飯とみそ汁が良いと本能でわかっているのですよね。

（意見）

そのイベントの申込みをしたのですが、満席で締め切られてしまって入れませんでした。

（意見）

ここに来ているお母さん達は、それぞれ各自でいろいろなイベントをされているので。

（市長）

大事ですよね。最初にお話しさせてもらったけれど、それが桐生なのですよ。そういう人達がどんどん同時多発的にいろいろなところで自分たちの活動をしてもらって、そこで違う人達が「私はこういうことができるよ」と。関りが生まれて関係が広くなって、強い良いネットワークができるという。そういうものが桐生の特長だとなれば一番良いと思いますね。

（意見）

今日は皆さん時間ぎりぎりまで押してしまってすみません。良いお話ができたのかなと思っています。市長さん、お忙しい中、ありがとうございました。

（意見）

ありがとうございました。

（市長）

いえ、とんでもないです。また、よろしくお願いいたします。

（意見）

遊びに行きます、私たち。

（市長）

はい、遊びに来てください。

（意見）

一ついいですか。皆さんのお話を聞いていて感じたことは、子育ては、こんなふうに育ってもらいたいと思ってもならないのだけれど、子どもは親の背中を見ています。学校でのスマホ対策の話がありましたが、子どもがやっているということは必ず親がやっているということ。だから自分を振り返って子どもにやらせたくないことは、自分がやらないように気をつけなくてはならない。親、保護者の行動が一番。いつの時代も親が子どもに教えたいことは、自分が気を引き締めて行わないと。そこを考えてもらえると良いと思います。難しいですよ、子育ては、でも楽しいですから。今日はありがとうございました。

（市長）

ありがとうございました。

閉会